

■ 戦略経営研究会 130th ミーティング 議事録

日 時：2019年10月5日(土) 14:00-17:00

場 所：東京/竹橋「ちよだプラットフォームスクウェア」

テーマ：地域経営のランドスケープデザイン ～自然と人、人と人との関係性と持続可能性～

発表者：廣瀬俊介さん(環境デザイナー(風土形成事務所)、専門地域調査士(日本地理学会)、  
東京大学空間情報科学研究センター協力研究員)

参加者：15人(財務コンサルタント、ビジネス研修講師、会社経営、会社員、FP、大学生  
NPO法人理事長、行政書士、司法書士等)

目次：

1. はじめに
2. ランドスケープデザインについて
3. 自然と人、人と人との関係から成り立つ地域
4. 地域・風土の成り立ちを読み解く
5. 風景という資本
6. 資本内容の確認(風景の調査)
7. 資本の管理と充実(風景の保全、修復、進展)
  - 7-1 「地域社会再生のシナリオ」
  - 7-2 飛騨古川での実践
8. 適正な地域経営へ - 結語

発表：

1. はじめに

この発表では、自然と人間の関係に着目して、地域を続く世代へ受け渡す、すなわち「持続可能にする」ための一つの考え方を示したいと思います。地域の持続にとって、地域の自然の物質循環のなかに人間の経済循環が置き直されることは必須と考えられます。そして、そこには、地域の経営を市民共同で行うことが求められはしないでしょうか。そうしたことを、この発表を通して問題提起します。

2. ランドスケープデザインについて

デザインは、商品の商業的成功を導きつつデザイナー個人の造形願望を満足する仕事ではありません。あるものの在り方を考え、それに則してあるものを形成することが、本当の意味のデザインに当たります。ランドスケープ(風景)には人の思いも含まれます。それは、その人が生まれ育った土地や暮らし慣れた土地へ抱く愛着などを指します。ランドスケープデザインは、自然との関係を調えることを基本に、人間が生活する場を作ること、作り直すことを指します。

また、生活者自らによる風土の形成を支えるなかで、その人の土地への見方を変えたり深めたりしながら、人と土地との関係を結び直すことを含みます。

ニューヨークのセントラルパークは、19世紀に造られました。マンハッタン島の市街化、人口増加の進行に対して、広大な森、衛生環境の整備などを求めた市民運動を発端とします。その設計者が自らの仕事を「ランドスケイプアーキテクチャー」と名づけ、以降デザインという言葉の普及に伴ってランドスケイプデザインとも呼ばれるようになっていきます。日本では、そこに生活する人々が主に自分たちの手で風景の管理と充実を行ってきたところへ、近代化に際してランドスケイプデザインの考えが輸入されてきました。本来、ランドスケイプデザイナーだから風景をデザインすることが自明であるのではなく、生活世界のイメージを共有する生活者が主体となつての生活と生業を通した風土の形成を支える仕事を、ランドスケイプデザイナーは担うべきです。

### 3. 自然と人、人と人との関係から成り立つ地域

地域、そして当地の風土は、そこにある自然に人間が暮らしと生業、相互扶助、信仰と祭礼といったさまざまな営みを通してはたらきかけてきた結果としてかたちづくられてきたと考えられます。

私は、人間の生存と社会の持続に必須である自然の物質循環を一つの軸に見立てて、地域・風土の成因と成因間の関係を整理しながら、その成り立ちを文脈的に理解する方法をつくってきました。

まず、それについて説明をします。

### 4. 地域・風土の成り立ちを読み解く

私たちがその上に生きる大地の生い立ちを辿ることから始めて、地域・風土がどうできてきたか簡単に振り返ります。大地のかたち、地形は、地殻や気候の変動、水が地表を削る浸食、そのことで発生した土砂がたまる堆積などを経て現在に到ります。大地の中身、地質は、マグマが地下で冷え固まってできた岩塊や火山灰が固結してできた岩塊、砂や粘土からなる堆積物であったりします。それぞれの岩石は風化速度などの性質を違え、それも手伝って地形は時間と共に変化します。地形はさらに、季節風や海流と相まって地域の気候に影響を与えています。

こうして地域ごとに地形、地質、気候が定まり、それらの環境条件に合った生物が棲みつき、微生物からは乳類までを含む生態系が生まれました。岩のくぼみへ風が吹き寄せたコケ類の胞子が育ち、その遺骸を微生物が分解したものに岩の風化物が混じって土が生成され、そこへ着床した植物の種子が発芽します。やがて光合成に必要な日光の量の多い植物の下に光がより少なくて済む植物が育ちながら、森林や草原が形成されます。それを、他の生物が餌場や棲み場に用います。植物の落葉や動物の糞尿などの生物の老廃物や遺骸は微生物に分解されて土に還り、続く世代の植物や動物の体をつくります。

このような自然から、人間は生まれ出ました。日本列島では、人間は縄文時代から湿地を田につくり替え始め、後年には河岸に堤防や水防林をもうけるようにもなります。台地や丘や山

の林では、薪や炭や堆肥になる落葉や柴を採るためにコナラやクヌギの世代更新を安定させて里山と呼ばれるようになる場所をもうけました。人間の行動範囲に含まれる土地のほぼ全てが厳密には人為的につくり替えられましたが、しかし多様な生物が生きられ、人間は彼らを医療から衣食住の充実までに利用してきました。

人間はまた、自らが暮らす地域で得られる資材の性質や、地域の風雪や日照に則して土木や建築を工夫しながら、社会生活の場となる集落や都市を築いてきました。そして、自らの生存と社会の持続に必須である自然の物質循環をつかさどる水に着目し、大小の集水域とそれらを結ぶ水系を地域単位として自然への畏敬の念を信仰に重ね、共に地域に風土を観るようになる要因となりました。

戦後からの農業の近代化や 1962 年に原油の輸入が自由化されてからの燃料革命の影響が広く大きく及ぶ以前の日本では、数々の地域で「人間は自然の中に身を置いてきた」といえはしないでしょうか。それに対して現在ほどまで問題が広がり、まだどのような可能性が残るかについて、地域・風土の成り立ちの理解の上に確認する作業が肝要となります。

宮城県南三陸町の伊里前川上流域に位置する弘川集落の風土の構造を描こうと試みた絵をご覧ください。家々は川べりから一段持ち上がった土地の上に建てられています。家と小屋の間から川べりへ下りる小道があります。石段のある水汲み場では、水をせき止めて静かに汲めるようにすると共にそこから水を落として勢いを弱め、下流側の川岸を崩れにくくしています。家々が建つ土地のふちは、石垣で押さえられます。この石垣は、川の水があふれたときには堤防のようにはたります。川べりに沿って通された小道の両脇にはカキドオシやユキノシタ、オオバコやドクダミなど薬効のある植物が生えます。

## 5. 風景という資本

私は、経済学者 E. F. Schumacher (E. F. シューマッハー) の著書の以下の文にふれて、風景を地域経営の資本と考えるようになりました。「人間には造れず、単に発見できるだけの資本、それが無いと人間はなにごとにもできない、代替物のない資本」、「われわれが所得だから浪費していいと信じ込んでいる“自然という資本”（中略）われわれを取り巻く生きた自然という資本を無駄遣いすると、危険に瀕するのは生命そのものである」。

私は、地域・風土の姿である風景を手がかりとした自然と人間、社会の関係の把握に基づくデザインを志向してきました。そこから、「自然という資本」が「消費、さらには浪費」されずに管理と充実が図られている、風景そのものを資本と見なす考え方を採るに到りました。

## 6. 資本内容の確認（風景の調査）

風景は、その観察・考究を風土の形成主体である生活者で行いながら調査します。不明な点は、彼らや地域内外の研究者に学び、他領域の技術者にも協力を受け、風景を通して風土の成り立ちを読み解くことをしてゆきます。

地域の風土の成り立ちの文脈は、地図や絵、写真を文章と組み合わせ、視覚伝達表現を工夫しながら情報媒体に載せて生活者などと共有します。こうした風景の調査、すなわち風景資本

の内容確認ができてはじめて地域的合理性に適った利害関係者間の合意形成を図ることができ、本質的な地域経営の構想が可能となると考えます。

## 7. 資本の管理と充実（風景の保全、修復、進展）

### 7-1 「地域社会再生のシナリオ」

経済学者神野直彦氏の著書から次の文を引きます。「地域社会の再生には二つのシナリオがある。一つは（中略）工場誘致という従来の路線の延長線上で持続可能性を求めるシナリオ」、「もう一つの地域社会再生のシナリオは、地域社会を本来の地域社会として再生するもの（中略）環境を保全して、改善して、地域文化を振興し、地域社会で営まれていた人間の生活を持続可能にすること」。

一方、近年のインバウンド需要拡大策から地域社会が変質するに至った例もあり、問題視されます。

### 7-2 飛騨古川での実践

私は、2000年に岐阜県飛騨地方の旧古川町役場より委託を受けて、同町域（面積98.11km<sup>2</sup>、人口約1万6千人）風土の成り立ちを読み解く質的調査を行いました。きっかけは、1999年の豪雨災害です。自分たちがどういう地域に住んでいるかを知る必要があると気付いたことからです。その成果において「飛騨古川」の理想の風土像を「朝霧たつ都」と表したところ、同町役場はこれを第五次総合計画目標と決めました。

2004年の市町村合併以降は、飛騨市（面積792.53km<sup>2</sup>、人口約2万4千人）が継続して同目標を旧町域での産官の事業他における価値基準とし、地域の物質循環のなかに人間の経済循環を置き直す生態経済学的な地域経営策（同市は「農村環境デザイン政策」と呼称）を展開されてきました。私は、風土調査成果が市民間で理解、共有されるための情報伝達媒体作成や、成果にもとづく生活環境保全林計画、林道余除地・沿道植林植生回復設計等を担ってきています。旧古川町役場がこうした調査を起案したのは、地方公共団体の行財政を地域経営と読み替え、さらにそれを地域に存する資本の適正な管理と充実として実行しようと考えたことに基づきます。

この政策のなかでは、飛騨匠に代表される当地の雅びな文化が古川盆地を囲む山野からもたらされる水の恵みに因り、朝霧はそれを支える豊かな水の巡りが目に見える姿を成したものと解釈して、理想の風土像を「朝霧たつ都」と言い表しました。これは、古川盆地の資本となる水、雪、循環、朝霧、農産物、お酒、そして、歴史、文化を羅列的に捉えるのではなく、関係性を見付け、文脈的に捉えることによります。また、世界ユネスコ無形文化遺産である「古川祭」なども、楽しみながら引き継がれつつ河川水系を軸として人々に恵みをもたらす物質循環系に風土の構造を重ねて見る意識の共有と継承を人々に促し、歴史、文化とともに、自然を守ることに繋がっています。そして、朝霧の発生条件が確保できなければ理想の風土像は将来に守り継げず、ひいては「人間の生活と地域社会を持続可能にする」資本の遺失を招き、環境、教育、福祉、医療、産業、文化などのいずれもが成り立ちにくくなるということを、市民と行

政担当者として確認し合っています。

このことをふまえて、旧古川町、現飛騨市では、自然災害への防備（治山治水）、水源涵養や生物多様性の回復（生物がその外界にある物質を摂取して自らの体をつくり、また繁殖をすること、すなわち「生物生産」が農林漁業の成因となる）を兼ねた森林管理の公益性を評価して所得補償を行うなど、「市民の共同の家計」たる行財政本来の意義に適った「市民の共同の事業」として、生態環境再生型公共事業と呼べる新たな雇用増、地域内での富の循環を少しずつ生み出そうとする策が起案され、実行されてきました。たとえば、水田は大気、大地を湿潤にします。霧が漂う中で育つ稲はうま味が増します。霧の中での天日干しは時間がかかりますが食感が良くなります。また、当地の植生は日本海側の気候の影響を主に受けながら、太平洋側の気候の影響も混じり、植物種が多いことで薬草も多い地域です。薬草というと特殊に感じられるかもしれませんが、身近なところでは先にふれたオオバコやユキノシタ、そしてスマレなどにも薬効があります。これらの収穫を、野山に出て体を動かし、興味を同じくする者同士楽しく語らいながら、時には笑い合いながら行うことは、再生可能な資源を利用した健康増進ともなります。人が自然に関わる理由にもなります。

こうした自然、人間、社会の関係調整から、地域風景の固有性が保持されもします。地域固有の風景資本に域外の人々が価値を見出だすこともあり、それを種々の産業の振興や地域経済循環の安定に結びつけて生かすことも考えられます。

#### 8. 適正な地域経営へ — 結語

自然と人間、社会の関係を調える適正な地域経営へ、日本人は速やかに歩む先を変えるべきであり、地域の姿である風景をそのまま資本ととらえてその管理と充実を図ることはその有効な方法となります。このことは、地域共同体の心のつながりが保たれることにも結びつきます。

以上